

研究論文

泉鏡花「化鳥」にみる外界への眼差し

伊藤 かおり

要約

本稿ではこれまで母子の絆を中心に論じられてきた泉鏡花「化鳥」を取り上げ、語り手とその母の外界への指向・志向を中心に新たな読みを試みた。主人公とその母は虐げられた恨みから人間を動物に見立てていたが、動物にみならず人、人間とみならず人を詳細に見ていくと、そこに母子の外界を忌避しつつも指向・志向する傾向が見えてきた。また、この作品は緻密な構造をもっており、天気の変化に変わりに従って、外界への指向・志向も変化していたことが判明した。

キーワード：泉鏡花、化鳥、子ども、外界、母子

一、はじめに

泉鏡花「化鳥」は明治三〇（一八九七）年四月発行の『新著月刊』創刊号に発表された短編小説である。この頃は鏡花の作家活動

の中でも初期に相当し、文壇に認められつつも、自らの表現を模索している時期であった。

この作品は全編が幼い子どもを擬した語りに貫かれている。須田千里「子どもがたり」によると、同時代の作家たち、特に若松賤子が翻訳した『小公子』や小杉天外「蝶ちゃん」の影響を受けているという。加えて、折りに触れて後述するが、母子の関係を軸に非常に多くの考察がなされてきた。実際、母子の関係を抜きにこの作品は語ることができない。また、作品全般に言えることだが、鏡花作品の難しさは連想によって話があちこちに飛躍していくところにある。この作品も例外ではないが、よく読むと緻密な構成がなされていることがわかる。

本稿ではこれらを踏まえた上で、軸足を少し語り手（子ども）の方に移して母子の外界への指向・志向を中心に新たな読みを試みたい。

二、作品の語りについて

愉快的な、愉快的な、お天気が悪くつて外へ出て遊ばなくつても可いや、笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかをびしょく濡れながら、橋の上を渡つて行くのは猪だ。(一)¹

以上の引用は「化鳥」の冒頭部分だが、ここで既に語り手は子どもであることがわかる。しかし、間もなく同じ第一章で次のように語られる。

寒い日の朝、雨の降つてる時、私の小さな時分、何日でしたつけ、窓から顔を出して見て居ました。(二)²

幼い子どもの口調で語られている中に、突如としてこのような語りが差し挟まれる。ここで読者は、語りの時期は成長して後であると判断の修正が迫られる。この幼い子どもの口調の中に成長した後だと明らかにわかる語りが入ることで、読者は混乱する。そして、語り手は成長しているがまだ若いのではないかと考える。語りの時期は生活の成り立ちが理解できる頃、自分たちの暮らしをある程度客観視できるようになった後だということは、「私は其時分は何にも知らないで居たけれども、母様と二人ぐらしは、この橋銭で立つ

て行つたので、一人前幾干宛取つて渡しました。」(三)³ということから判断される。

以降、この語りは、子どもの語り口を用いた独白のように進む。由良君美は「鏡花における超自然」の中で、「化鳥」は「少年の〈意識の流れ〉に従った〈内的独白〉の一人称口語体が純粹に貫徹された作品⁴」としており、一見して語りの相手がいらない、もしくは語りの相手は読者であるかのようにも見えるところがある。一方で、語りを聞く特定の相手がいるのではないかと思わせるところもある。十一章で主人公が〈翼の生えた美しい姉さん〉を探して鳥屋の前に立った場面では、「鸚鵡なんざ、くるツとした、露のたりさうな、小さな眼で、あれで瞳が動きますよ。毎日々々行つちやあ立つて居たので、しまひにやあ見知顔で私の顔を見て頷くやうでしたつけ⁵」と鳥の様子が語られる。「動きますよ」「でしたつけ」という表現には、相手の興味を汲み取るうとする心の動きがうかがわれ、明らかに目の前にいる相手に説明する口調である。

山田有策はその論考「未成熟と夢」において「化鳥」の語りについて、語り手が成長しているにも拘らず「語っているのは八、九歳の少年であり、全篇がこの少年の〈語り〉によって成り立っているのだが、それがあくまでも少年の意識にそって終始している点が異様なのである。」⁶と述べている。成長すれば必ず昔の自分に対して「こうすれば良かった」というような批判が出てくるものだが、「化鳥」では語り手が八、九歳の自分に何ら批判や訂正を加えている様

子がないのが極めて異様で、それがこの作品の幻想性を際立たせている。例えば、主人公は川岸に繋がれている猿と遊ぼうとしたところ驚かされて川に落ち、またその後、助けてくれた（翼の生えた美しい姉さん）を探して夕暮れの梅林に迷い恐い体験をしたが、それも幼かった頃の思慮のなさゆえなどと批判することがない。

このように、成長した後の語り手が子ども語りと同化して進むのが「化鳥」の特徴であり、語り手は独白的に語っているように見えるが、途中で特定の語りの相手の存在も見え隠れする。この矛盾を併せ持っているのが「化鳥」という作品であり、それは語り手である主人公の他者との向き合い方、外界への指向・志向にも影響を与えている。次章では、主人公が外界の他者をどのように捉えているのかを見ていく。

三、主人公と母親にとつての（人間）

——〈獣〉と（人間）の境界

「化鳥」では、語り手であり母親に「廉」と呼ばれる主人公と、その母親との特異な人間観の表明にかなりの部分が割かれている。彼らは橋の袂の番小屋で暮らしており、そこで橋を渡る人々から橋銭を徴取することで生活をしている。彼らは橋を渡る人々や番小屋から見える人々を動植物に見立てている。最初は子どもとその子どもに付き合う母親との遊びに見えたこの行為が、作品を読み進むに

つれて、世間から虐げられた母親の深い怨念に端を発していることを読者は知ることになる。

「化鳥」はある雨の日の回想として語られる。ここで主人公は、橋を渡る人々やその他の人びとを動物に見立てて雨の無聊を慰めている。この回想の中で最初に動物に見立てられているのが、橋の上を渡る人である。「笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかをびしょ／＼濡れながら、橋の上を渡つて行くのは猪だ。」（一）と冒頭の文にはある。しかし、これが雨の間だけではなく日常的になされていることだとわかるのが、第二章から第三章に続く、小学校の先生との論争についての回想の中である。要するにこの作品は主人公の幼い頃の回想として語られているが、その回想の中でさらに四、五日前の出来事として（先生）との論争を回想している。修身の時間に人が「世の中に一番えらいものだ」（二）⁷ という（先生）に、主人公はこのように言い募る。

橋を挟んで、川を遡つたり、流れたりして、流網をかけて魚を取るのが、川の中に手拱かいて、ぶる／＼ふるへて突立つてるうちは、顔のある人間だけれど、そらといつて水に潜ると、逆になつて、水潜をしい／＼五分間ばかりも泳いで居る、足ばかりが見える。其足の恰好の悪さといつたらない。うつくしい、金魚の泳いでる尾鰭の姿や、ぴら／＼と水銀色を輝かして跳ねてあがる鮎なんぞの立派さには全然くらべものになるのぢ

やあない。さうしてあんな、水浸になつて、大川の中から足を
出してる、そんな人間がありますものか。で、人間だと思ふと
をかしいけれど、川ん中から足が生えたのだと、さう思つて見
て居るとおもしろくつて、ちつとも嫌なことはないので、つま
らない観世物を見に行くより、ずつとましなのだつて、母様が
さうお謂ひだから、私はさう思つて居ますもの。(三)⁸

さらに読み進めると、このように日常的に人間を動物に見立てて
遊んでいることは、人間、特に理不尽な理屈で人間の貴賤を定める
者、そしてそれを見過ごす者への批判にもなっていることが分か
る。

例えば第八章から第九章には〈鮫鱧博士〉と呼ばれる人物が通り
かかり橋銭を出し渋る。黄金の太い指環をはめており、出した名刺
の肩書が「市内衛生会委員、教育談話会幹事、生命保険会社社員、
一六会会長、美術奨励会理事、大野喜太郎」(九)⁹となっていた。
一六会の詳細は不明だが、少なくとも他は全て近代制度のもとに整
備されてきたものに纏わる役職である。しかし、この数の多さか
ら、ほとんどは名誉職、即ち無用の役職と思われる。そしてこの
〈鮫鱧博士〉は徽章を身に付けており、地位と名誉を笠に着て橋銭
で暮らす親子を見下し、橋銭を出し渋ったのだ。

このように、動物への見立ては特に近代制度を笠に着る人間への
批判とも読み取れるが、語り手の怒りが人々を獣に見立てる場面が

ある。それが、溺れたところを助けてくれた〈翼の生えた姉さん〉
を探す途次、鳥屋の前で人々の反応を受ける主人公の語りに表れて
いる。主人公は次のように語る。

(略) 翼の生えたうつくしい姉さんは居ないのツて、一所に
立つた人をつかまへちやあ、聞いたけれど、笑ふものやら、嘲
けるものやら、聞かないふりをするものやら、つまらないとけ
なすものやら、馬鹿だといふものやら、番小屋の媽々に似て此
奴も何うかして居らあ、といふものやら。皆獣だ。(十一)¹⁰

これは、それまで動物に見立てた人々を冷静に観察し続けた主人
公の怒りが露出している場面で、この物語の外で母子が虐げられ続
けたこと、主人公がそれをどのように受け止めていたかがわかる場
面である。主人公は「皆獣だ。」と短く言い捨てており、そこに激
しい怒りが感じられる。ここで、近代制度を笠に着る人々への批判
だと思われた動物への見立てが、実は自分たち母子を虐げ続け、あ
るいは無関心で居続けた人々への怒りだったことが判明する。しか
し、怒りの表出によって、実は主人公は他者との関わりを期待して
いたことがわかる。期待していたからこそ怒りが湧いたのであって、
期待していなければこれまでどおり冷静に動物への見立てを行って
いただろう。主人公はその母と違い、他者への期待がある。これこ
そが、後に述べる外界への志向の根源となる。

これまでは、主人公が動物に見立てた人々を中心に見てきた。一方で「化鳥」には動物に見立てられない人、即ち人間として扱われている人が登場する。

動物に見立てる遊びは、理不尽な理屈で人間の貴賤を定める者、母子を虐げる者とそれに準ずる人に対して行われてきた。しかしここで意外な人物が最後まで動物に見立てられることがなかった。それは人は他の動物よりも秀でているかどうかで主人公と論争した女性教師である。論争の最後に、主人公は「先生より花の方がうつくしうございます」(四)^[1]と言いつち不興を買った。また、(先生)は「鮫鱈博士」と同様に橋銭を置かず橋を渡ったこともある。そんな(先生)がなぜ動物に見立てられることがなかったのか。ここで(先生)との論争の経緯を詳しく見ながら考えていこう。

主人公が母親から教え込まれた価値観は、近代教育制度と対立するものだと言える。(先生)は、人は「世の中に一番えらいものだ」と言う。それに対して主人公は「人も、猫も、犬も、それから熊も、皆おんなじ動物だつて。」(二)^[2]と反論する。この意見は生物学的分類としては正しい。しかし、「修身のお話」(三)^[3]としては、近代教育制度の中に身を置く(先生)には受け入れられない。主人公は高等な生きものとしての人間を否定しているのだ。「人間は生きもので一番えらい」という、生きものに序列をつける傲慢さは、引いては人間の間に序列を作り、あらゆる差別に繋がっていく。鏡花は一貫してその理不尽を物語に取り入れる。しかし、実は主人公

はこうした価値観から自由ではない。人間を動物に見立てるといふ行為は、他者に対する侮蔑を伴うものであり、動物に見立てたものを自分たち(人間)より下に見る行為だったのだ。「人間と動物たちは同じだ」と言う主人公自身にも「人間が一番えらい」という価値観が染みついている矛盾がここにある。そして、主人公はそのことは自覚していない。(先生)が動物に見立てられないのも、(先生)が言う「人間が一番えらい」という価値観に無意識のうちに同調しているからとも考えられる。

もう一人、重要人物の中で動物に見立てられなかったのが、(猿廻のぢいさん)である。この(猿廻のぢいさん)は、番小屋の対岸に繋がれている猿のかつての飼主であり、主人公は直接会った事がない。この回想の時からさらに七、八年前、主人公が生まれる前に母が会った人物である。この回想の時に猿に餌をやるものは、「湿地茸」(釣り人)、「坊ちゃんだの」、「紅い着物を着て居る、みいちゃんの紅雀」「青い羽織を着て居る吉公の目白」「お邸のかなりやの姫様」(五)^[4]であり、多くが人間ではないものに喩えられている。裕福な子どもたちは鳥になぞらえられており、可愛らしさを愛でる存在として比較的好意的に描かれている。それは

時々悪戯をして、其紅雀の天窓の毛を撈つたり、かなりやを引掻いたりすることがあるので、あの猿松が居ては、うつかり可愛らしい小鳥を手放にして戸外へ出しては置けない、誰か見

張つても居ないと、危険だからつて、ちよいと繩を解いて放して遣つたことが幾度もあつた。(五)¹⁵

という表現にもうかがわれる。しかし、そこには鑑賞する者、される者という距離があり、彼らは主人公にとつて共感を寄せる相手ではない。この猿に関わる者の中で、主人公の母が共感し、母から話を聞いた主人公が共感した者が〈猿廻のぢいさん〉である。〈猿廻のぢいさん〉は、唯一自分を労わってくれた主人公の母にこのように言った。

(あ、奥様、私は獣になりたうございます。あいら、皆畜生で、この猿めが夥間でござりませう。それで、手前達の同類にものをくはせながら、人間一疋の私には目を懸けぬのでござります。(略)(七)¹⁶

人間である〈猿廻のぢいさん〉に目を懸けた人は〈猿廻のぢいさん〉と同類の人間、猿にのみ目を懸けた人は猿の仲間、即ち獣というわけである。これに対して主人公は「うまいこと知つてるな、ぢいさん。ぢいさんと母様と私と三人だ。」(七)¹⁷と、回想の中で快哉を叫ぶ。ここには主人公の母親が後に抱えることになったのと同様の恨みがあり、同時に、このように同類を虐げる人間とは何なのかという問いかけも為されている。

また、重要人物ではないが〈獣〉と見なされなかった人として騎兵たちが挙げられる。この騎兵たちは、〈翼の生えた姉さん〉を探して鳥屋の前に立つ主人公に、唯一優しくした人々である。主人公はこの騎兵たちについて次のように語っている。

(翼の生えたうつくしい姉さんは居ないの。)ッて聞いた時、莞爾笑つて両方から左右の手でおうやうに私の天窓を撫でて行つた、それは一様に緋羅紗のずぼんを穿いた二人の騎兵で——聞いた時——莞爾笑つて、両方から左右の手で、おうやうに私の天窓をなでて、そして手を引あつて黙つて坂をのぼつて行つた。長靴の音がぼつくりして、銀の劍の長いのがまつすぐに二ツならんで輝いて見えた。そればかりで、あとは皆馬鹿にした。(十一)¹⁸

騎兵はある程度の教育を必要とする。そのため、義務教育以上の学校にも通い、一般より長い学生時代を過ごしてきたと考えられる。町の人々は早くから働き、子ども時代が少なかった。「翼の生えたうつくしい姉さんは居ないの。」という表現をロマンとして、あるいは子どもの無垢の表れとして受け入れられる人が町の人々の中にはいなかった。このことを考えると、主人公を理解するものは、さらに外の世界にあるということががわかる。語りの相手などもその一人であろう。

動物に見立てられなかったが完全な人間としても描写されていない重要な人物が〈翼の生えた美しい姉さん〉である。〈翼の生えた姉さん〉は猿によって川に落ち溺れた主人公を助けた。しかし、主人公は〈翼の生えた姉さん〉の姿を臆気に覚えているのみである。主人公は気が付いた時、傍にいた母に「一体助けて呉れたのは誰です。」(十¹⁹)と問いかける。これに対して母は「廉や、それはね、大きな五色の翼があつて天上に遊んで居るうつくしい姉さんだよ。」(十²⁰)と答えるが、その時の態度はこれまで主人公が見たことのないものだった。

(略) 私がものを聞いて、返事に躊躇をなすつたのは此時ばかりで、また、それは猪だとか、狼だとか、狐だとか、頬白だとか、山雀だとか、鮫鱈だとか、鯖だとか、蛆だとか、毛虫だとか、草だとか、竹だとか、松茸だとか、湿地茸だとかおいひでなかつたのも此時ばかりで、そして顔の色をおかへなすつたのも此時ばかりで、それに小さな声でおつしやつたのも此時ばかりだ。(十²¹)

元々、人びとに対する母の恨みは深かった。母は零落した時、世間の人びとから苛酷な扱いを受け、その恨みから主人公に人を動物に見立てるわざを叩き込んだ。その様子は次のように語られている。

人に踏まれたり、蹴られたり、後足で砂をかけられたり、苛められて責まれて、煮湯を飲ませられて、砂を浴せられて、鞭うたれて、朝から晩まで泣通しで、咽喉がかれて、血を吐いて、消えてしまひさうになつてゐる処を、人に高見で見物されて、おもしろがられて、笑はれて、慰にされて、嬉しがられて、眼が血走つて、髪が動いて、唇が破れた処で、口惜しい、口惜しい、口惜しい、畜生め、獣めと始終さう思つて、五年も八年も経たなければ、真個に分ることではない、覚えられることではないんださうで、お亡くなすつた、父様とこの母様とが聞いても身震がするやうな、さういふ酷いめに、苦しい、痛い、苦しい、辛い、惨酷なめに逢つて、さうしてやうくお分りになつたのを、すつかり私に教へて下すつたので、(略) それでちゃんと教へて頂いて、其をば覚えて分つてから、何でも、鳥だの、獣だの、草だの、木だの、虫だの、茸だのに人が見えるのだから、こんなおもしろい、結構なことはない。(略) (六²²)

しかし、この中であつて〈翼の生えた姉さん〉は母にとつても今までにない特殊な人であつたことがうかがえる。母は主人公の問ひかけに動揺したが、この理由は語られていないため、様々に解釈できるだろう。零落して以来、初めて共感し得る人であつた、また、主人公の他者への執着を読み取つて動揺したとも解釈できる。しか

し、ここで重要なのは、母が〈翼の生えた姉さん〉を動物に見立てることもなく、「天上に遊んで居るうつくしい姉さん」と表現しているところにあるだろう。これまで主人公が鳥に見立ててきたのは子どもなど見目の良い人間だけであった。母親もそのように見立てて来たと考えることが出来る。〈翼の生えた姉さん〉は人間の姿を保ち、さらにそこに母子にとつて見るに快い鳥の翼を備えている。勿論、本当に翼が生えていたと考えることはできるが、主人公や母、〈猿廻のぢいさん〉と共感し得る人物であることは確かであろう。

主人公は最後に母と〈翼の生えた姉さん〉を同一視しているが、猿に傷つけられた人に情をかけているという点ではこの二人は共通している。

四、主人公と外界との関わり

これまで主人公とその母とが誰を動物に見立てたのか、また誰を人間として見ていたのかを辿ってきた。このことは、主人公と外界との関わりにも及んでくる。動物に見立てる遊びには外界への眼差しが反映されているからだ。母からこのような特殊な見方を教え込まれ、人々と距離を取っている主人公には、無垢の眼差しだけではなく排他性と他者への侮蔑がある。「だけれど今しがたも母様がいひの通り、こない、ことを知つてゐるのは、母様と私ばかりで、

何うして、みいちゃんだの、吉公だの、それから学校の女の先生なんぞに教へたつて分るものか。」(六)⁽²⁵⁾ という独白を見てもそれがわかるだろう。主人公は人を動物に見立てるということを他者と分かち合うつもりはなく、自分たちにしか理解できないということが優越感にもなっている。このような主人公の排他性の根源は、母の没落体験にある。その恨みは根深く、「いぢめられて泣いたり、撫でられて嬉しかつたりいゝしたのを、其都度母様に教へられて、今ぢやあモウ何とも思つて居ない。」(六)⁽²⁶⁾ と語っていることから判るように、母は他者に対する情を断つよう主人公を粘り強く矯正していった。

このように排他的に見える主人公だが、その一方で実は外界との関わりをもち、母もそれを許容しているところがある。それは、主人公と〈先生〉の関係が悪化したことについて母が授けた対処にも見てとれる。主人公が「先生より花の方がうつくしうございます」と言ったことに對し、母は「そんなこと人の前でいふのではありません。お前と、母様のほかには、こない、こと知つてゐるものはないのだから。分らない人にそんなこといふと、怒られますよ。唯、ねえ、さう思つて居れば可いのだから、いつてはなりませんよ。」(四)⁽²⁵⁾ と念押しをした。その上で、「そして先生が腹を立つてお憎みだつて、さういふけれど、何そんなことがありますものか。其は皆お前がさう思ふからで、あの、雀だつて餌を与つて、拾つてゐるのを見て、嬉しさうだと思へば嬉しさうだし、頬白がぢいさんにさ、れ

た時悲しい声だと思つて見れば、ひい／＼いつて鳴いたやうに聞えたぢやないか。」(四)⁽²⁶⁾と論し、「それでも先生が恐い顔をしておいでなら、そんなものは見て居ないで、今お前がいつた、其うつくしい菊の花を見て居たら可いでせう。」(四)⁽²⁷⁾と助言している。この一連の助言は、〈先生〉を排除せずうまくやつていくことを前提としており、母親は主人公を学校から切り離すつもりはないことが判る。主人公にとって望ましい相手ではないにも拘らず、母は〈先生〉のことを動物に見立てず、終始人間として扱う。〈先生〉は主人公にとって近代教育の入り口であり、零落の身を抜け出すには立身出世をしなければならぬ。母は主人公に怨念を引き継がせつつも、社会との関係は保ち続けている。

このように母の方に主人公を外界と関わりを持たせ続ける意向があるが、主人公の方にも外界と交わり続ける意思が無意識にある。第五章で他の子どもたちが猿を構っている様子を語っていたが、「いつものやうに遊びに行つて、人が天窓を撫でてやつたものを、」(十)⁽²⁸⁾とあるとおり、主人公も他の子どもたちと同様に猿を構っていた。主人公も他の子どもたちと同じ遊びをしているのである。この猿がいるのは主人公と母の住む番小屋の対岸という象徴的な場所である。主人公は外界との交わりへの志向と排他への志向という両極を、無自覚に、しかし自在に揺れ動いている。

主人公の語りの間に見え隠れする語りの相手も、外界との関わりを感じさせるものである。先に述べたとおり、主人公は独白的な語

りを大部分において通しながらも、特定の相手の存在を感じさせる部分がある。しかし、それを抜きにしても、文学という特質上、語りは必ず読者に対しても聞かれたものであり、従つて他者に理解できようにある程度の客観性は必要となる。少なくとも外界への指向を必要とするものである。

語りの後半では、主人公がこの物語で初めて他者に執着する様子が見られる。〈翼の生えた姉さん〉への執着である。主人公を川から救い出した人物が誰なのか母が言い淀んだことについて、主人公が初めて自分以外の他者に関心をもち執着したことに対する動揺を読み取る論考は多い。例えば植木朋子は「泉鏡花『化鳥』試論」において「番小屋」空間内の〈聖〉性を保ち、外部から何者にも脅かされることなく暮らし続けてきた〈母様〉はこの時、初めて〈番小屋〉空間の崩壊の危機を感じたのではなからうか。」と解釈している。しかしクライマックスでは〈翼の生えた美しい姉さん〉を探し求めて夕暮れの梅林に迷った主人公を母が探し出し、母子の絆が再確認され、母も〈翼の生えた美しい姉さん〉の存在を許容している。

「可いけれど、廉や、お前またあんまりお猿にからかつてはなりませんよ。さう可い塩梅にうつくしい羽の生えた姉さんが何時でもあるんぢやありません。また落つこちようもんなら。」

(十)⁽²⁹⁾

このように、かつて〈翼の生えた美しい姉さん〉の話を出すことに及び腰であった母の方から言及しており、それがきっかけとなつて半年前の川で溺れた際の回想が始まる。翼を備えているが獣に喩えられない人物で、母子が共感を寄せる可能性のある人ではあるが、この時点では紛れもなく他者である。

このように排他的な一方で外界との関わりを保ち続けている母子だが、既に主人公の中に外界が内在化されていると考えることもできる。〈翼の生えた美しい姉さん〉に憧れて夕闇の迫る梅林に探し求め、鳥の声や蛙の声に脅かされて立ちすくんだ主人公は次のような体験をする。

ふるへながら、そつと、大事に、内証で、手首をすくめて、自分の身体を見ようと思つて、左右へ袖をひらいた時、もう、思はずキヤツと叫んだ。だつて私が鳥のやうに見えたんですもの。何んなに恐かつたらう。(十二)³⁰

この場面では、主人公の抱える矛盾が主人公の目に視覚化されたと見ることができる。これまで他者を動物や鳥に見立てて侮蔑してきたが、自分が鳥に見えたことに主人公は恐怖を感じ受け入れられない。人間も獣も平等だと言いつつ、自分たちを〈人間〉とみなし、他者を動物にみなして侮蔑するという矛盾がここで読者に明らかになる。しかし、この矛盾を抱える主人公の心性こそが、彼自身

がある程度外界に開かれた存在であるということを証明してあげる。

五、外界への指向と天気

この作品では先に述べたような主人公の外界との関わりが徐々に示されていくわけだが、それは作品の緻密な構成のもとに進められていく。この作品は、語り手である主人公が自らの幼い頃のある雨の日を回想するという設定で語られる。先に述べておくと、天気の変化に従って、主人公の外界への指向が明らかになっていくのである。

冒頭では雨に降り籠められた主人公が、橋を渡る人を猪に見立てている。ここで、この作品の主人公が見立てをして遊ぶこと、そして全体が回想の語りであることが示される。そして第一章最後の「ねえ、母様、先生もずるい人なんかねえ。」という主人公の言葉をきっかけに、この雨の日より四、五日前に起こった〈先生〉との論争へと話が進み、ここで母子が他者をどう見ているかが明らかにされる。この論争の回想が語り終わった第四章終了時点で、「戸外には、なか／＼雨がやみさうにもない。」(四)³¹とあるとおり、雨は降り続いていく。

しかし場面が変わり、第五章冒頭で「少し晴れて来たから、もの濡れたのが皆見える。」(五)³²状態になる。ここで対岸の猿を見た

ことをきっかけに、主人公の生まれる前の八、九年前の話へと移る。主人公が母から聞き覚えた内容が披露され、母が人間を動物に見立てるようになった経緯と、母が共感する〈猿廻のぢいさん〉の話が語られる。先程も述べたとおり、ここで母の抱く他者への不信、排他性が明らかになる。だが、これは母親自身も望まずに外の世界に目を向けていることの証である。ここで主人公は「あのをかしな顔早くいつて見たいな」(八)³⁴と語るが、雨に降り籠められていた間は人を動物に見立てることで満足していた主人公が、少し晴れてきたこの時点で外界のものである猿との関わりを求めようになっっている。

ここで〈鮫鱈博士〉が橋を渡り、その傘が風に煽られ川に流れた。そのことを知らせた主人公に母は「廉や、それはね、雨が晴れるしらせなんだよ。」(八)³⁵と言う。〈鮫鱈博士〉とは橋銭をめぐる遣り取りがあつたが、冒頭に登場した猪に見立てられた人とは何ら遣り取りがなかったことを考えると、雨が晴れてくるに従つて外界との繋がりができたと見ることができると言える。

〈鮫鱈博士〉との遣り取りの後、母の言うとおりの十章冒頭では雨が晴れた。母が〈翼の生えた姉さん〉の話を出したことがきっかけで、半年前の出来事が回想される。母子にとつては明らかに外部の人間、他者に関する回想がここでされる。そして、結末では主人公がこのように語る。

雨も晴れたり、ちやうど石原も迂るだらう。母様はあ、おつしやるけれど、故とあの猿にぶつかつて、また川へ落ちてみやうか不知。さうすりやまた引上げて下さるだらう。見たいな！羽の生えたうつくしい姉さん。だけれども、まあ、可い。母様が在らつしやるから、母様が在らつしやつたから。(十二)³⁶

主人公は母と〈翼の生えた姉さん〉を同一視しつつも、それを疑っている。他者である〈翼の生えた姉さん〉と再会するために「また川へ落ちてみやうか不知」と一瞬でも思う主人公は、自分と共感し得る他者との積極的な関わりを求めていると言えよう。

六、終わりに

主人公は獣も人間も同じだと言いつつ、人間を動植物に見立てて侮蔑しており、矛盾を内包したまま反省をすることがない。第十二章で〈翼の生えたうつくしい姉さん〉を探して夕暮れの梅林に迷い込んだ時、自ら鳥になつたような幻影にとりつかれ恐怖を覚えるが、母によつてそこから救出されても成長した語り手による反省はない。この矛盾をありのまま受容して尚且つ矛盾を抱えることに悩まない主人公像には、子どもの精神の柔軟性が表れている。

この作品は成長した語り手が、かつて子どもであった自分に同化したかのように子どもの言葉で語り、そこにふと浮上するかのよう

に成長した語り手の言葉が入ってくる。それが異様でもあるが、子どもの語りを貫くところに幻想を魅せる仕掛けがある。〈翼の生えた美しい姉さん〉の登場、続く夕暮れの梅林での恐ろしい体験に、成長した語り手の見解や解釈は述べられず、子どもの経験がそのまま不思議として描かれるからだ。この作品が幻想文学として成立しているのは、子どもの不確かな認識のままの語りにもとづいて大い。

また、この作品は綿密な計算の上に構築されてもいて、天気の変化に合わせて、主人公の外への志向も高まっていく。そして、雨が降っている間は自らの価値観の解説に留まっているが、晴れたところで主人公の冒険が回想される。そして結末の語りでは「だけれども、まあ、可い。母様が在らつしやるから、母様が在らつしやつたから。」と、母親のもとに安住している。これは作者・泉鏡花の亡母憧憬に拠るものであり、主人公は母の呪縛を逃れ得なかった、逃れることを拒否したという解釈が多くなされているが、子どもが回想によって冒険を追体験して安心できるところに帰ってきた、その当然の帰結として読むこともできるのではないだろうか。

注

- (1) 『鏡花全集 第三卷』一一四頁。以降、全集からの引用については、全てかな遣いはそのままとし、旧字は新字に改めた。
 (2) 同右。
 (3) 同右、一一五頁。

- (4) 『国文学解釈と教材の研究』第一九卷第三号、一一五頁。
 (5) 『鏡花全集 第三卷』一四四―一四五頁。
 (6) 『文学』第五一巻第六号、一二〇頁。
 (7) 『鏡花全集 第三卷』一一八頁。
 (8) 同右、一二二頁。
 (9) 同右、一四〇頁。
 (10) 同右、一四五頁。
 (11) 同右、一二四頁。
 (12) 同右、一一九頁。
 (13) 同右、一一八頁。
 (14) 同右、二二六―二二七頁。
 (15) 同右、二二七頁。
 (16) 同右、一三三頁。
 (17) 同右。
 (18) 同右、一四五頁。
 (19) 同右、一四三頁。
 (20) 同右。
 (21) 同右。
 (22) 同右、二二九―一三〇頁。
 (23) 同右、二二九頁。
 (24) 同右、一三一頁。
 (25) 同右、一二五頁。
 (26) 同右。
 (27) 同右。
 (28) 同右、一四二頁。
 (29) 同右、一四一頁。
 (30) 同右、一四九頁。
 (31) 同右、一一七頁。
 (32) 同右、一二六頁。

(33) 同右。

(34) 同右、一三四頁。

(35) 同右、一三七頁。

(36) 同右、一四九頁。

参考文献

『鏡花全集 第三卷』一九四一年二月二五日、岩波書店

須田千里「子どもがたり——明治二十年代一人称小説一斑——」(『文学』第

九卷第二号、一九九八年四月一〇日、岩波書店)

由良君美「鏡花における超自然——『化鳥』詳考」(『国文学解釈と教材の研究』第一九卷第三号、一九七四年三月二〇日、学燈社)

山田有策「未成熟と夢——『化鳥』論——」(『文学』第五一卷第六号、一九

八三年六月一〇日、岩波書店)

植木朋子「泉鏡花『化鳥』試論——間に舞う囀——」(『跡見学園女子大学国

文学科報』第三〇号、二〇〇二年三月十八日、跡見学園女子大学国文学

会)

Gaze on the Outside World in “*Kecho*” by Izumi Kyoka

Kaori Ito

Abstract

In this paper, I take up “*Kecho*” by Izumi Kyoka, which has been discussed mainly on the bonds between mother and child, and try to give a new interpretation. The protagonist and his mother likened people to animals because of grudges against people who oppressed them. However, seeing in detail people likened animals and people admitted as human beings, the tendency to avoid and orient to the outside world is shown. Moreover, it turns out that this work has a precise structure, and the intention to the outside world had shifted according to the change of the weather.

Keywords : Izumi Kyoka, *Kecho*, child, outside world, child and mother